桐の極印

一

野村胡堂

「親分、変な奴が来ましたよ」

ガラッ八の八五郎は、長んがい顎を鳶口のように安唐紙へ引っ掛けて、二つ三つ瞬きをして見せました。

「お前よりも変か」

何んという挨拶でしょう。銭形平次は斯んなことを言いながら、日向に寝そべったまま、粉煙草をせせっているのです。

「へッ、あっしよりは若くて可愛らしいので」

「新造か、年増か、それとも――」

「何処かの小僧ですよ。――銭形の親分さんは御在宅でございましょうか――って、大玄関で仁義を切ってますよ、バクチ打と間違えたんだね。水でも打っかけて、追い返しましょうか」

「待ちなよ、そんな荒っぽいことをしちゃならねえ。この平次を鬼のような人間と思い込んで鯱鉾張っているんだ、ていねいに通すが宜い」

「へエ――」

やがて、ガラッ八のいわゆる大玄関の建て付けの悪い格子戸をガタピシさして、一人の客を招じ入れました。

「今日は、親分さん」

敷居際でお辞儀をして、ヒョイと挙げた顔を見ると、せいぜい十五六、まだ元服前の可愛らしい小僧でした。

正直らしいつぶらな眼も、働き者らしい浅黒い顔も、そして物

馴(な)れないおどおどした調子も、妙に人をひき付けます。

「そんなに改まらなくたって宜いよ。――この野郎に脅(おど)かされて固くなったんだろう。安心するが宜い、お上の御用は勤めているが、人を縛るのが商売じゃねえ」

平次は八五郎と小僧を見比べながら、取なし顔にこんな事を言うのでした。

「それがその――縛って貰いたいんで、親分」

小僧は途方(とほう)もないことを言います。

「縛って貰いたい――誰だい、そいつは？」

平次はようやく居住居を直しました。可愛らしく膝小僧を二つ並べて、真っ正面から平次を見入る、一生懸命な二つの瞳を見ると、ツイ斯(こ)う生真面目にならずには居られなかったのです。

「旦那を殺した奴を縛って下さい、親分さん」

「旦那を殺した奴？　そいつは穏(おだや)かじゃないな。――一体誰が誰を殺したというのだ。落着いて話して見るが宜い」

平次は雁首(がんくび)で煙草盆を引寄せて、相手の気の鎮まるのを待つように、ゆるゆると二三服吸いつけました。

「私は、市ガ谷田町の宝屋久八の奉公人で今吉と申しますが、主人の久八が五日前に亡くなって、もうお葬(とむら)いも済みましたが、その死にようが、何んとしても腑(ふ)に落ちません。お寺でも文句無しに引取った葬式ですから、私風情が苦情を申したところで、何んの足(た)しにもなりませんが」

小僧はちょっと言い渋(しぶ)りました。

「何うしてそれが定命(じょうみょう)でないと解ったのだ」

平次は追っ駆けるように訊ねます。

「旦那が亡(な)くなる前、うわ言のように――七千両、あいつにやられるか――と言いました」
「――七千両、あいつにやられるか――というのだな」
「へエ」
「それを誰と誰が聴いていた」
「私とお嬢様だけで」
「それっきりか」
「旦那が亡くなった後で番頭の善七さんが、（あの女がやったに違いない）と、独り言のように申して居りました」
「――」
「それから、離屋(はなれ)に住んでいる御親類のお安さんが、ゆうべ庭で番頭さんとひどい言い合いをして、――お前が殺したに違いない。お主殺しは磔刑(はりつけ)だよ――と大きな声で怒鳴っておりました」
「それから」
「それっきりですが、こんな事を聴くと、旦那の死んだのは、ただ事でないような気がします」
「それだけのことでは俺が乗込むわけにも行くまいよ」
「でも親分さん」
今吉は若くて敏感な者の本能的な恐怖(きょうふ)に引ずられて此処へ来たのでしょう。いちおう平次が宥(なだ)めたくらいのことでは、容易に引取りそうもありません。
「親分、そいつは変な匂いがしますね、行って見ましょうか」
傍から八五郎が、鼻をヒクヒクさせながら乗出します。
「待ちなよ、つまらねえ事に十手を振り廻しちゃ、町方の恥だ。――ところでそれはお前一人の思い付きか」

「いえ、あの――」
今吉は背後の方――入口を振り向きました。
「八、小僧さんには連れがあるようだ。呼んで来るが宜い」
「へエ」
八五郎は草履(ぞうり)を突っかけて外へ飛出しましたが、その辺には今吉の連れらしい者は見付かりません。
「路地の中には誰もいませんよ、親分」
「そんな筈はない――ひどく犬が吠えていたようだ。あの犬は人に馴れているから滅多に吠える筈はないが」
いつも路地の口に居眠りをしている、角の酒屋の赤犬が、先刻(さっき)けたたましく吠えたのを平次は思い出したのです。
「お嬢さんがいっしょに来ましたよ。極りが悪いからって外で待っていましたが、――変だなア」
今吉も外へ飛出しましたが、路地の中は言うまでもなく、広い往来へ出て、前後左右を見廻しても、それらしい姿は何処にも見えません。
「なんだって中へ入らなかったんだ」
平次は少しとがめる調子でした。
「黙って帰ったんじゃありませんか」
そんなことを言いながらも、平次と、八五郎と小僧の今吉は、手分けをしてそこいら中探し廻りましたが、十八娘のお清は平次の家の前で、烟(けむり)のように消えてしまったのです。

二

「小僧さん、お前はすぐ市ガ谷の店へ帰ってくれ。お嬢さんが何うかしたら、家へ帰っているかも知れない。急に用を思い出したが、改めてお前を呼出すのも極りが悪いとか何んとか、若い娘にはありそうなことだ、いや、是非そんな事であって貰いたい」

「ヘエ」

今吉もすっかり萎(しお)れ返っておりましたが、急に元気付いて、帰り支度を始めました。

「八、お前は出来るだけ近所の人に訊いてくれ、若くてこんな様子をした娘を見なかったか、――と。きりょうは良いのか」

「ヘエ、十人並――と世間では言っておりますが」

今吉は昂然(こうぜん)として言いきりました。

「身扮(みなり)は？」

「襟の掛った黄八丈(きじょう)の袷に、麻(あさ)の葉(は)を紋(しぼ)った赤い帯でございます」

「それだけ聴いたら、人ごみの中でもわかるだろう」

「それじゃ、親分」

八五郎と今吉は銘々の方角へ飛んで行きました。

「お前さん」

「何んだ」

お勝手から手を拭きながら出て来たのは、平次の女房――お静でした。

「そのお嬢さんなら、先刻路地の外で見かけましたよ」

「何んだ、お前も見ていたのか、早くそう言えば宜いのに」

「口を出すと、岡っ引の女房が、お役目のことに口を出しちゃ

見っともないって叱られるんですもの」
お静は怨ずる色がありました。内気で優しいお静に取っては、程経てからでも斯う言うのが精いっぱいだったのです。
「事と次第によりけりだ。冗談じゃない、その娘がどんな様子をしていたんだ」
「変な男と話していました。ひどく驚いた様子で――」
「変な男と――驚いた様子で――？」
「その男はずいぶん汚ない風をしていました。四十がらみの髭だらけの――いえ、物貰いではなかったようです」
「そいつは惜しい事をしたなア」
事件の背後に何にか重大なものを感じたのか、平次はしきりに首を捻っております。
それから半刻ばかり経つと、ガラッ八は帰って来ましたが、黄八丈を着た若い娘が一人。路地の口に立っていたところまでは、近所の人も見ておりますが、その先は困ったことに誰も確かめた者がなく。右へ行ったという人も左へ行ったという人もあって、娘の行先はますますわからなくなるばかりです。
それからまた半刻ほども経ったころ、小僧の今吉は、寒天に大汗を掻いて飛んで来ました。
「親分、お嬢さんはお店へも帰ってはいません。御近所の懇意な家を一と通り訊いて歩きましたが、どこへも行った様子はございません。きっと旦那を殺した悪者がお嬢様も誘拐したんでしょう、お願いですから捜してやって下さい、親分」
今吉もそう言いながら、畳の上へ手を落して、上眼遣いに二つ三つお辞儀をするのです。

「成程そいつは放って置けまい。八、一緒に行くか」
「先刻からもうウジウジしてるんですよ。親分が御輿を上げなきゃ、引っ担いでも行こうと思ってね」
「冗談じゃない――若い娘が何うかすると、お前の眼の色が変るから恐ろしいよ」
平次は冗談を言いながらも手早く仕度をして、ガラッ八と今吉をつれて市ガ谷へ急ぎました。何んでもないような事件のくせに、妙に気掛りなものがあって、無精者の平次も、ジッとしては居られなかったのです。
が、しかし、市ガ谷の宝屋へ飛込んだ平次も、今度ばかりは手の下しようもないのに驚きました。主人の葬いは、三日も前に済んでいるし、神田へ行った娘のお清の帰りが遅いからと言ったところで、まさか銚子の伯母さんのところへ、人を出して問合せるほどの事件でもなかったのです。
主人の死んだ後の店を引受けてやっているのは、善七という若い番頭で、せいぜい三十にもなるでしょうか、色白の優男で、少し上方訛りはありますが、客扱いは申分ありません。
「御苦労様でございます。主人の亡くなったのはちょうど五日前で、町内の本道――蓼庵さんの御見立てでは卒中ということでございました。ヘエ、ヘエ、少しお酒が過ぎましたようで」
こう言った調子で、平次の問いにもハキハキと応えてくれます。
「後々のことは何うなるのだ」
「いずれお嬢様に養子をなさるのでございましょう、――御養子のお話はちょいちょいございますが、まだ決っておりませんようで、ヘエ」

「宝屋の身上(しんしょう)は？」
「まだ新しい店で、金貸しというと、たいそうな金持のように聞えますが、一貫や二分の小口が多いので、大したことはございません。まアせいぜい五百両か千両というところでございましょう」
主人久八が死に際に言ったという『七千両』とは大分隔(へだた)りがあります。
「ところで、今日朝から外へ出た者はなかったのか」
「皆んな揃っております、――小僧の今吉とお嬢さんが出かけただけで」
「あと家にいたのは誰と誰だ」
「御新造(ごしんぞ)のお利栄さんと、私と手代の勘次郎と、下女のお万と、それっきりでございます。――それから離室(はなれ)のお安さん」
「それは何んだ」
「御主人の遠縁の方で、ヘエ」
「そのお安さんに逢って見たいが」
「御案内いたしましょうか」
「いや、それには及ばない――が身許をもう少し詳(くわ)しく聴かしてくれ」
「誰も詳しいことは存じませんが、本人の言うことでは何んでも以前は何とか検校(けんぎょう)に囲われていたそうで――綺麗な人でございます。一年ばかり前から、この家に引取られておりますが、ヘエ」
「何んとか検校――というと音曲(おんぎょく)の方か」
「いえ、鍼(はり)の方だそうで、――尤も検校は嘘でございましょう。唯の鍼医者の流行按摩(はやりあんま)らしい話で、ヘエ」
この男は妙にお安という女に反感を持っている様子です。

平次はそう言う番頭に別れて、庭伝いに離屋（はなれ）の方へ行きました。

「八」

「へエ」

八五郎は何処からともなく現われます。

「お前は町内の本道（内科医）の蓼庵（りょうあん）さんのところへ行って、死んだ主人の病気のことを念入りに訊いて来てくれ。それから医者なんてものはいろんな事を知っているものだ、如才（じょさい）もあるまいが、主人のこと、身内のこと、奉公人たちのことも出来るだけ聴いて来るが宜い」

「へエ」

八五郎は飛んで行きました。

三

「親分さん、御苦労様で御座います。飛んだ人騒がせをして」

離屋から転げ出すように、平次を迎えたのは二十四五の、これは眼のさめるような女でした。綺麗だとか、美人だという意味ではなく、派手で表情的で、肉体的にも豊かな感じがする上に、人を見るにも、いきなり瞳と瞳を合せると言った無造作なことをせずに、斜（なな）めに下から嘗（な）めるように見上げて、斯（こ）うとろけるようにっこりすると言った、容易ならぬ表情の持主でした。

その上、物を言う調子が格別で、一つ一つの言葉を、口の中でこね廻して、特別上等の餡蜜（あんみつ）を付けて啜（すす）ると言った具合で、それを聴いている方の悩ましさと言うものはありません。言葉に対して特別な感覚を持っている、眼の不自由な人に仕えて、自然に斯

うしたエロキューションを自得したのでしょう。それがまた、人に厭(あ)かれる原因にもなるのですが、自惚(うぬぼ)れが強くて才気走っているお安は、それを強大な武器のように、すべての人に振りまわさずには居られない様子です。

平次は咄嗟(とっさ)のあいだに斯んな事を考えているのでした。

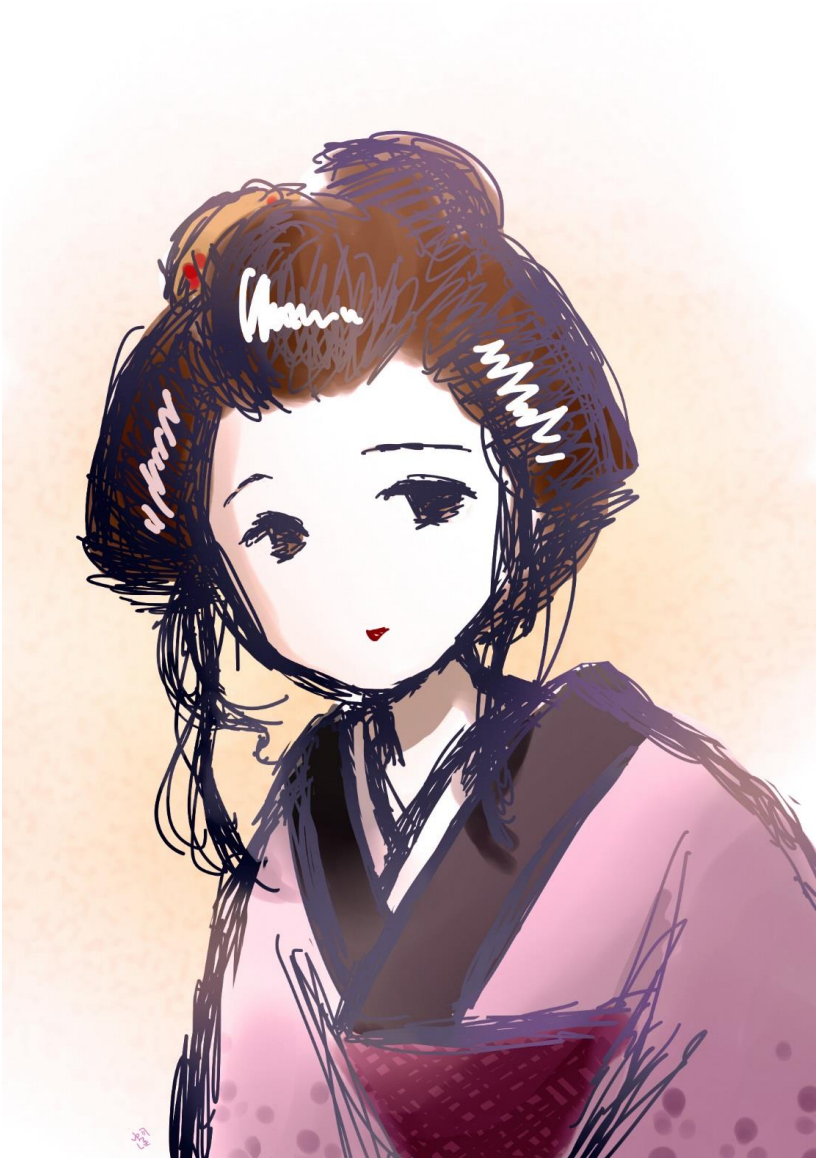
「少し休ませて貰おう」

平次は離屋の縁側に腰をおろしました。少し横柄なのは、日頃の平次にない態度ですが、この女に白い歯を見せたら、さぞ厄介だろうと言った、平次の潔癖(けっぺき)さのためでもあります。

「どうぞ、親分さん、――実はお待ち申しておりました」

「何を話したいというのだ」

平次は出してくれた玉露(ぎょくろ)らしい茶には見向きもせず、いきなり用事に入って行きます。



©2017 萩 柚月

「主人の急に亡くなったのが、どうも変でなりません、私はどうかしたら――」

お安の声は急に小さくなりました。

「番頭の善七が怪しいというのか」

「いえ、そう申すわけではございませんが、主人が死ねばあの人はこの離屋を貰って、私を追い出すに決っております」

「それはどういうわけだ」

「主人は三年前にこの離屋を建てました。行々(ゆくゆく)は隠居をして御自分で住むつもりだと言っていたそうですが、一年前に私がこの家へ来るようになってからは、恩人の娘だからと、私をここへ入れてくれました。若いとき私の親に世話になったんだそうで、酔(よ)うといつも、そんな事を申しておりました」

「それを番頭がかれこれ言うのはおかしいじゃないか」

「あの人は、主人が死ねばお清さんの後見人になって、跡継の決まるまでは、この家を自由にすることになっております。そうなれば、平常から仲の悪い私を追い出して、ここに入ることになるでしょう。この離屋が気に入って、何んとかして私を母家(おもや)に入れて、自分はこの離屋に住まおうとした人ですから」

平次は改めて、このたった二た間の離屋を、縁側から覗いたりしました。木口も大したものではなく、ただ頑丈に出来ているというだけで、打見たところは、洒落(しゃれ)た母家の普請(ふしん)などとは、比べものにならない御粗末なものです。

部屋は六畳と四畳半のたった二つ、それにお勝手が付いただけで、調度や建具も至って下品で、平次が見ては何んの取柄もない離屋ですが、善七とお安が、それに執着(しゅうちゃく)するのはどうしたことで

しょう。
「お清が行方不知(しれず)になったが、お前に心当りはないのか」
平次は改めて次の問いに入りました。
「ね　親分さん。あの娘も可哀想じゃありませんか、たった十八や十九で」
「何が可哀想なのだ」
「宝屋の跡取ですもの、――あの娘が居なくなれば、ずいぶん得をする人もあるんですもの」
「婿(むこ)はきまっていなかったのか」
「身上目当てに、ずいぶん婿になり手もあったようですが、――それよりは居なくなってくれる方が手っ取早いと思い直したんでしょう、可哀想にあのきりょうですもの、――尤(もっと)も、手代の勘次郎どんとは、近頃妙に仲がいいようでしたが」
そんな事を言うお安です。
平次は宜い加減胸を悪くして離屋を引揚げました。母屋へ帰って、女房のお利栄、手代の勘次郎、下女のお万などに逢いましたが、何んの手掛りもありません。
お利栄は四十二三の愚痴(ぐち)っぽい女で、夫の急死と娘の失踪(しっそう)に顚倒(てんとう)し、何を訊いてもしどろもどろですが、主人の前身については、
「亡夫は上方に長くおりました。請負(うけおい)仕事などをしていたようです。三年前から江戸に落着いて、こんな商売を始めましたが、大工や左官の心得はあっても、帳面の方は不得手で、善七どん任せのようでございました」
「その善七は何時からいっしょに居るのだ」
「三年前、上方から連れて参りました」

「お安の方は？」

「一年ほど前、不意に訪ねて来ました。それまでは話もなかったのですが、主人の遠縁の者だとか言いまして――」

お利栄に取っては、この若くて美しくて、悩ましくさえあるお安の存在は、相当不愉快なものらしく、こう話しながらも、醜い顔が異様に引歪(ひきゆが)みます。

手代の勘次郎は、二十二三でしょうか、ただ平凡なお店者(たなもの)というだけ。

「旦那の亡くなったのは、何んかわけがありそうですが、私どもにはわかりません。それにつけても、お嬢様は可哀想でございます」

お清にだけ、この男の注意は集中している様子です。

下女のお万は、二十四五の達者な女で、働き者らしい代り、深い考えはないらしく、主人の死にも、お清の行方不知にも大した関心は持っておりません。

「親分、無駄骨折ですよ」

そこへ帰って来たのはガラッ八の八五郎でした。

「何が無駄骨折なんだ」

「町内の本道は何んにも知りませんよ。主人の死んだのは、確(たし)かに卒中で、これは間違いはない、万一見立て違いなら、この坊主首をやるといぅ意気込で――親分の前だが、あの汚(きたな)い首なんか貰っても役には立ちませんね」

こう言った八五郎です。

四

それから十日十五日と無事な日が過ぎました。松が取れて正月も過ぎると、平次もさすがに忙しくなって、宝屋のことに係り合っても居られなくなりましたが、それでも、ときどき八五郎をやって、いろいろの情報だけは集めさせて置きました。

娘のお清は相変らず姿を見せず、宝屋の家の者でも近頃はお清のことなどを心配しているものはなく、母親のお利栄さえ、行方不知(しれず)になった娘のことを、口にも出さないという有様です。

不思議なのはお安で、どう心境が変化したものか、あんなに仲の悪かった番頭の善七とすっかり仲直りが出来、

「ヘッ、見ちゃ居られませんよ、夜になるとあの生っ白い番頭野郎が、離屋(はなれ)に入浸って、ベタベタしているそうで、ヘッ」

ガラッ八は唾(つば)を吐きます。主人が死んだ後の宝屋は、睨みをきかせる者のないままに、相当乱脈になって行く様子です。

正月もあと二三日という日の朝、霜(しも)を踏んでもういちど小僧の今吉が飛んで来ました。

「親分さん、お願いいたしますが」

「何が始まったんだ、大変あわてて居るじゃないか」

「番頭さんが急にいけなくなって、今朝息を引取りました」

「え、あの善七とか言った」

「お医者はまた卒中だと言いますが、私にはどうも腑(ふ)に落ちないことばかりです」

「？」

「番頭さんは離屋へ行って居て、急に悪くなりましたが、私が物

音を聴いて駈け付けた時は、まだ息があって、主人の時と同じように――七千両、七千両――と繰り返しておりました」

今吉の報告には、何んか容易ならぬものが潜んでいそうです。

「よし、行って見よう。お前も来るか、八」

「へッ、こんな事になるだろうと思っていましたよ」

八五郎は獲物を嗅ぎ出した猟犬のようにいきり立ちます。

市ガ谷田町へ行くと、打ちつづく事件に、宝屋はさすがに無気味なまでに静まり返って、平次と八五郎の一行が入っても、迎える者もありません。

「仏様は？」

「離屋でございます」

今吉に案内されて離屋へ入ると、

「まア、親分さん方、困ったことになりました。番頭さんがせっかく私と仲直りしたのに、こんな事になって――」

六畳に型の如く安置した善七の死骸を指して、お安はシクシクと泣き始めるではありませんか。

「どうしたのだ、あんなに仲が悪かったじゃないか。こいつが定命でなきゃ、下手人は差詰めお前だぜ」

平次に睨まれながらも、八五郎はツイ斯うからかって見たくなりました。女の態度は、空涙にしても、あまりにも人を馬鹿にしております。

「いえ、それは何方とも思い違いがあったからの事で、打ち明けて話して見ると、悪く言うところも、言われるところもありません。――それどころか、私と善七さんはこの間から末の末まで約束した仲なんです」

何んという憶面のなさでしょう。平次も八五郎もしばらくは開いた口が塞がりません。

平次はそれを宜い加減に聴流して、ともかくも善七の死骸を改めました。顔を覆った白い布を取ると、思ったより厳しい顔をしておりますが、何んの苦悩の跡もなく、顔にも身体にも、馴れた平次の眼で見ても、人に害められた形跡は露ほどもありません。

「傷はないな、八」

「耳の穴まで見ましたよ、蚤にさされた痕もありません」

「舌も、眼瞼も、口中にも変りはない」

「やはり卒中ですかね」

「医者がそう言うから間違いはあるまいよ」

「でも――」

「お前もそう思うだろう。卒中が二人つづくのは、ないことはあるまいが、少し変だな。それにこの男はまだ三十そこそこだ」

平次はなおも念入りに調べましたが、怪しい節は少しもなく、お安の惚気まじりの弁解を、ただ長々と聴かされるだけです。

念のため、善七の部屋を見せて貰いました。母屋の四畳半で、よく片付いておりますが、持物は思いのほか少なく、行李が一つと夜具布団があるだけ、その行李の中にも、奉公人の持っている通り一遍のものばかりで、何んの変った物もありません。

「八、天井裏を見ようと思うが、提灯を借りて来てくれ」

「ここに裸蠟燭がありますが、間に合いませんか」

「宜いとも、それへ灯を点けてくれ」

押入の隅に投り出してあった燃えさしの百目蠟燭――紙にも何んにも包まず、埃の中に転がっているのを拾って

「おや、この蠟燭は変ですよ」
「どうしたんだ」
「古くなったせいか、恐ろしく重いんで」
「古くなって蠟燭が重くなる道理はあるものか、どれ」
その太い百目蠟燭の、半分ほどになった燃えさしを受取った平次も驚きました。
「なるほど、こいつは変だぞ、八。——十手でこれを砕いて見てくれ、中に何んか入って居るようだ、——敷居の上で宜いとも」
「おや、おや、おや、鉄ですね、これは」
「鏨のようだ」
蠟燭の中から飛出したのは、大人の小指ほどの、鋼鉄で作ったもの、その一端——平に磨いた方を見ると、五三の桐がありありと彫ってあるではありませんか。
「親分、そいつは何んでしょう」
八五郎の眼はさすがに光ります。
「迷子札の極印さ」
「ヘエ、やはり干支のようなもので」
「そうとも、太閤様の紋だから、申の歳と言った判じ物だろう」
平次の言葉が、明かに冗談とわかっておりますが、八五郎はいちおう感心して見せます。部屋の外には、誰やらそれとなく中の様子に耳をすましているのです。
「こんな物もありましたよ、親分」
行李の底から見付けたのは慶長小判が二枚。
「そりゃ良いものが手に入った。落とさないように持っていてくれ——こんな時にでも小判というものに財布の底を覗かして置け」

「へッ」

五

事件は思わぬ発展をしたのです。

善七の行李から見付けた二枚の慶長小判を持って、平次はすぐ金座の後藤へ廻り、当代の庄三郎に逢ってそれを鑑定させると、

「これはいけない。小判は紛(まぎ)れもなく上質の慶長小判だが、極印が偽物(にせもの)だ」

と言下に答えるのです。代々の後藤家は金座の御金改役として、天下の通貨を掌(つかさど)り、わけても祖先後藤祐乗の打った極印に対しては、一種微妙(びみょう)な鑑定法が、一子相伝的に伝えられていたということです。

祐乗の極印が信用絶大であったのはその為で、後藤の当主の鑑定には、全く疑いの余地もありません。

「真物の小判に、偽の極印を打つとはどういうわけでしょう」

平次も、この関係は呑みこみ兼ねました。普通の贋造(がんぞう)小判は、銅脈か何んかに偽(にせ)の極印を打ったもので、真の小判に、偽の極印を打つというのは、ちょっと考えられない事です。

「お勘定奉行でいちおう調べて頂くが宜い。が念のため、私の心覚えを言っておくが、先年大阪城御修理のとき、石垣の間から豊家の残党が隠して置いたものと見えて、夥(おびただ)しい慶長小判がでてきたことがある。その小判は後藤桐(ごとうぎり)の極印のないもので、ことごとく御上に引上げた筈だが、ことによれば幾枚か、――いやどうかすると相当の数が、人足か請負(うけおい)の手で隠されたかも知れぬ」

「それでございますよ、旦那」

平次の疑いは、一ぺんに解決しました。大阪城修理の請負や人足の中に、宝屋久八が交っていないとは限らず、その時持出されて江戸へ運ばれた無極印の慶長小判も、五枚や十枚ではなく、あるいは七千両という夥しい額に上らないとは限らないのです。

事は重大になりました。

平次は、さっそく与力笹野新三郎に報告し、その出役を願って、一挙にこの事件を解決しようとしました。

夥しい人数はすぐ様市ガ谷田町に繰り出され、遠巻に宝屋を取巻くようにして、念入りな調べが始まりましたが、数十人の手で一日がかりの探索も空しく、宝屋の店にある商売の資本の外には、怪しい小判などは一枚も出て来なかったのです。

「怪しいのは離屋だ。あの建物を番頭とお安が執念深く奪い合っていた」

平次の号令で、番頭の死骸は母屋に移され、離屋は徹底的に調べられました。天井裏も、床下も長押の裏も、畳などは一々裂いて見ましたが、慶長小判は愚か、小粒一つ出ては来かったのです。

「フ、フ、飛んだ大掃除ねエ、煤掃きなら暮に済んだのに」

ニヤリとするお安、この妖艶な女の毒舌は妙に人を苛立たせます。

「女、舌が長いぞ」

ガラッ八は喧嘩を買って出ました。

「怒ったの、まア、済まなかったわねエ」

「八、その女に掛り合う隙に、もういちど番頭の死骸を調べて見るが宜い。離屋をあんなに奪い合ったり、急に仲がよくなったり、

考えて見ると変なことばかりだ。番頭が、本当に卒中で死んだのなら、俺は坊主になって見せるよ」

平次もツイ我慢がなり兼ねました。

「まア、銭形の親分が坊主に――ホ、ホ、飛んだ可愛らしい新発意が見られるでしょうよ」

「畜生ッ、待って居ろ」

八は飛んで行きました。

が、善七の死骸をどう念入りに調べても傷らしいものは一つも見当らず、毒死の疑いも全くなかったのです。

「どれ、俺が見てやる」

とうとう平次もやって来ました。まだ三十を越したばかりの平次は、若くもあり血の気もあり、お安の挑戦に歯を喰いしばってはいられなかったのです。

が、それも結局は失敗でした。

「まだ生きて居るかも知れませんよ、フ、フ」

女はその傍に立って、冷たい笑いを笑っております。

「八、髷を解いて見ろ」

「女は元鍼の名人の囲われ者だと言ったが、人の身体の鍼壺は六百五十七穴、そのうち命取りの禁断の針が一ヵ所あるということだ」

「あッ、ありましたよ親分」

八五郎は踊り上がりました。髷を解いた死骸の頭――毛に隠れて蚤に螫されたほどの小さい痕が、ありありと残って居るではありませんか。

「あッ、八。女が逃げるぞ」

「えッ、神妙にせい、御用だッ」
咄嗟の間に、飛出そうとする女は、八五郎の馬鹿力に、無手と押えられたのです。

六

番頭の善七を殺したのは、間違いもなくお安の仕業でした。
善七と仲直りしたと見せかけ、酒で性根を失わせて、急所に五寸という長い鍼を打ったのです。
此処までは、スラスラと白状したお安が、慶長小判の隠し場所となると、知らぬ存ぜぬの一点張りで、何んとしても口を割りません。
「平次、まだ小判は見付からぬか」
ときどき笹野新三郎に、斯んな事を言われるのも、平次に取ってはかなりの苦痛です。
「やはり千両箱に入っているのでしょうか、親分」
そんな事を言うのは八五郎でした。
「いや、大阪城の石垣の間から見付けて、東海道をはるばる人目につかぬように江戸まで運んだんだから——待てよ八、お前あの偽極印の小判を持っているかい」
「飛んでもない。御奉行所へ差上げましたよ、大事な証拠だ」
「ちょいと借りて来てくれ。明日で宜いよ」
その翌る日、八五郎は南の奉行所から偽の小判を借り出して来ました。
「こう見ると、真物と変りはないね、——尤も、こちとらは滅多に

真物に御目にかかることもないが――」
「偽でも宜いから三日ばかり持って見度え」
「馬鹿だなア」
そんな事を言いながら、物尺を持出して平次は念入りに小判の寸法を測りました。
「親分、小判の寸法なんか取って、何をやるんで」
「安心しろ、贋物を造るわけじゃない、――ところでお前は算盤がいけるか」
「二一天作の五でしょう、あいつは虫が好きませんよ」
「一と坪の壁へ、これを一枚並べに塗り込んだとしたら、何枚並ぶだろう、――慶長小判は横一寸三分の縦二寸三分五厘だ、壁の広さは五尺七寸四方として」
平次は算盤を出しましたが、こいつが面倒臭くなると、ガラッ八に手伝わせて、壁の表面へ小判を当てて、チュウチュウタコカイと勘定しましたが、結局。
「一と坪に千と三十二枚だ、親分」
ガラッ八は頓狂な声を出します。
「荒壁へ叩込むように小判をメリ込ませて、上塗をすると、一坪に千三十二枚で、あの小さい離屋に七千両の小判を隠すのは何んでもないことになるね」
「へエ――驚いたね」
「小判というと、千両箱の事ばかり考えて嵩張るものと思ったからいけなかったんだ。サア、行こう、八」
二人は市ガ谷に飛びました。

× × ×

離屋の壁の中から七千枚の小判がでてきた時は、八五郎は思わず歓声をあげました。

「これで何も彼も済んだ。飛んだ骨を折らせたな、八」

平次もさすがにホッとした様子です。

「まだありますよ、娘のお清はどこに居るんでしょう。まさか殺されたわけじゃないでしょうね」

八五郎は相変らず、娘のことばかり心配していたのです。

「心配するな、ピンピンしているよ」

「へエー？　親分は知っていたんで」

「いや、知っているわけじゃないが、――あの母親の顔を見るが宜い、近頃はすっかり明るくなっているだろう」

「へエ？」

「あれが一人娘が行方不明になった母親の顔かよ、八」

「？」

「お清を隠した者が、そっとあのお袋に耳打したのさ、――お清を此家(ここ)へおくと命が危ないから、しばらく私が隠しておきます――と言った具合に」

「誰です、そいつは？」

「手代の勘次郎だよ、――あれはいずれ娘の聟(むこ)になるだろう、――お清は不縹緻だが、心掛の悪い娘ではなさそうだ」

「ね、親分、私には解らない事ばかりですよ。いったいこれは何うした事なんで？」

八五郎はとうとうしびれを切らしました。

「よく解っているじゃないか、主人の久八と番頭の善七が大阪城で七千両の小判を盗み出し、蟻(あり)が物を運ぶように、少しずつ運ん

で江戸へ持って来たのさ。お安は多分以前は久八の妾か何んかで、七千両の経緯をよく知っていたんだろう」

「主人の久八を殺したのは誰です」

「誰でもないよ、主人はやはり卒中で死んだのが本当だろう。それを善七はお安の仕業と思い、お安は善七の仕業と思ったのさ。最初から二人が相談してかかれば、知れっこはないのに、疑い合ったのが運の尽きだよ――勘次郎がこの様子に気を揉んで、人を頼んでお清の後を跟けさせ、自分の叔母さんの家へ隠したので、騒ぎが大きくなったんだよ」

「へエ」

「離屋の壁の中に隠した小判は、極印がなくて使えないので、番頭の善七は鏨の極印を拵えて、その小判に打つつもりだったんだろう。見本に二枚だけ極印を打って見付かったが、七千両の小判が皆んなバラ撒かれたら大変なことだった。危ない話さ」

平次もホッとした様子です。

まもなくお安は処刑され、宝屋は闕所になりましたが、勘次郎とお清は小さい店を開いて、幸福な日を送ったということです。そしてあの小僧の今吉も――。

（編注）

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩　柚月

初出―「オール讀物」昭和二十二年一月号　文藝春秋新社

底本―「銭形平次捕物全集」第八巻　河出書房　昭和三十一年八月十五日初版

編集・発行　銭形倶楽部